

## 平成 27 年度豆類振興事業調査研究(雑豆需要促進研究)成果概要

1. 課題名 「豆食文化の伝承をめざした幼児向け教材の開発」
2. 研究者 宇部フロンティア大学短期大学部食物栄養学科 助教 山下 晋平

### 3. 成果概要

#### 【研究目的】

郷土料理をはじめとして日本伝統料理には大豆等の豆類が多く用いられている。一般家庭においても消費量が減少してきているものの大豆・小豆・いんげんまめ等の豆類は利用されている一方で、山口県の郷土料理である「ささげごはん」に用いる「ささげ」は食卓に上がることが少ない。さらに、核家族世帯の増加や食事の欧米化などにより、郷土料理に触れる機会が減少し、郷土料理を次世代へ伝承しにくくなってきている。そのため、いかに郷土料理を次世代へと伝えて行くかを考えていく必要がある。

また、子どもの食教育において家庭が重要な役割を持つと述べられているが、家庭の役割が外部化・専門化の方向へ進み、子ども達は知識や技術がなくても食べることには困らない環境となっている。それに伴って、食教育の場が家庭から教育の場へと移行せざるを得なくなり、教育機関への食育の導入が重要となってきた。しかし、教育機関の一つである幼稚園では栄養士配置が義務化されていないため、幼稚園で行う食育において幼稚園教諭が果たす役割は大きくなってきている。それにも関わらず、幼稚園教諭は養成校において幼児の身体的特徴や保育方法に関する専門科目を学ぶ中で小児栄養について学ぶ時間数が限られているのが現状である。そのため、幼稚園教諭が使いやすい食育教材を開発する必要がある。

そこで本研究は、ささげの認知度調査を行うと同時に、ささげを使用している郷土料理について幼児が学べる教材の開発を行うこととした。

#### 【研究方法】

##### 1. ささげの認知度調査

本学の学生及び保護者と本学の付属幼稚園児の保護者を対象に、ささげの認知度調査を行った。

##### 2. 学習教材の開発及び評価

山口県の郷土料理である「ささげごはん」を題材に、幼稚園教諭が普段の保育現場における「読み聞かせ」の一環として食育を行えるような教材の開発を行った。幼稚園教諭 126 名に開発した教材である絵本を読んでもらい、作成した絵本について質問紙調査を行った。

##### 3. 開発した教材の効果

山口県 U 市と S 市内の幼稚園に作成した教材及びプログラムを郵送し、協力が得られた 11 園で読み聞かせを実施した。実施後、幼稚園教諭の負担及び教材の評価を行うために、質問紙調査を行った。

## 【研究成果】

### 1. ささげの認知度

ささげの認知度・食事経験・調理経験はそれぞれ 30.3, 24.8, 15.3%と順に低くなっていった。また、ささげごはんの認知度と食事経験はどちらも 10.0%ととても低いという結果が得られた(図 1,2)。

「ささげ」や郷土料理である「ささげごはん」の認知度だけでなく、食事経験も低かったことから郷土料理の伝承ができていないことが明らかとなり、伝承していくための努力が急務であると考えられた。

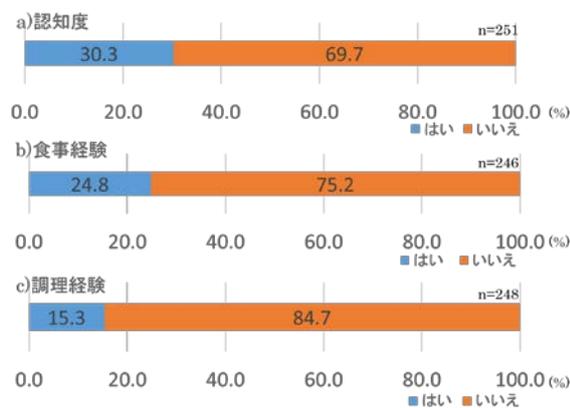


図1 ささげの認知度

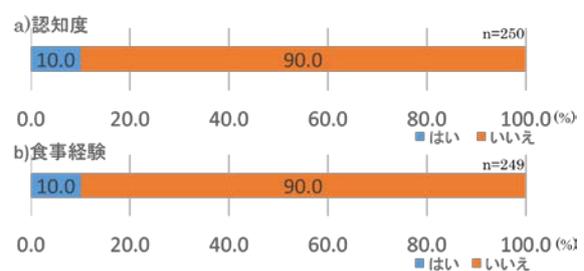


図2 ささげごはんの認知度

### 2. 教材の評価

開発した絵本(図 3)を幼稚園教諭に評価を依頼したところ、幼稚園教諭の「ささげごはん」の認知度は 16.7%と低かったにもかかわらず、幼児に読み聞かせてみたいとの回答は 78.4%と多く得られた(図 4)。

また、開発した絵本の対象年齢については、年中・年長との回答が多く、幼児からでも郷土料理に触れる機会を持たせることができる教材であると推察された。



図3 開発した絵本(一部抜粋)

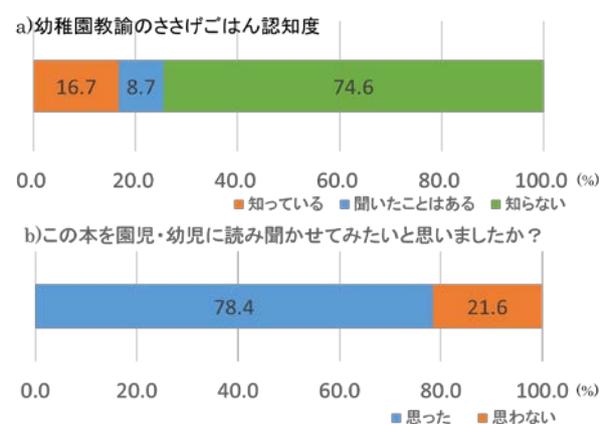


図4 絵本の評価

### 3. 読み聞かせにおける幼児の反応

ほとんどの幼児がささげごはんを知らなかったが、読み聞かせを行うと「わぁ～おいしそう」や「たべてみたい」などの発言が幼児から得られた。そのため、郷土料理を題材とした絵本を開発することは、幼児が郷土料理について見て学ぶ機会を増やすだけでなく、食事に対して興味をもたせることができると考えられた。

その一方で、リズムよく読み聞かせを行ってもらうために絵本の文中に「ゴー!」という言葉を入れたことにより、「ゴー!」の部分に子どもは喜んでしたが、その部分の楽しさに、絵本の内容がかき消されてしまう気がすると言ったような意見が得られたため、改善する必要がある。

### 4. 読み聞かせを実施した読み手の負担

教材を使用した感想として「参加型で楽しめる絵本だった」という意見が得られた一方で、「物語性があると良い」といったような意見が得られた。また、「普段の絵本に比べて使いやすいか」という質問に対し、63%の人が「使いやすい」、「変わらない」と答えた。だが一方で、37%の人が「使いにくい」と答えた。このような結果が得られた原因としては、ささげ及びささげごはんの認知度・調理経験の低さや「物語性」があまりなかったことが影響していることが推察された。

#### **【まとめ】**

今回作成した教材は、郷土料理を知らない人や調理経験がない人も読み聞かせてみたいという回答が得られたことから、幼児向けの教材として有用性があると示唆された。しかし、今回の教材では調理過程に重点を置いたため、「使いにくい」という意見も多かった。そのため、「ささげ」についての内容をもう少し取り入れ、幼児だけでなく実際に読み聞かせを行う幼稚園教諭にも「ささげ」を知ってもらうことにより、「ささげごはん」の認知度を上げることができると考えられた。

最後に、「ささげごはん」を題材とした教材を作成し、食育の一環として利用されることで、幼稚園の給食で「ささげごはん」が提供され、「ささげ」に触れる機会が増えることにより、「ささげ」の認知度や消費量が上がることを期待したい。

#### **【今後の検討課題】**

1. 幼稚園教諭から得られた意見を参考に、開発した教材の改良を行った。今後、その絵本をもとに再度評価を依頼しようと考えている。
2. 「幼児に郷土料理を伝えていくのは難しいが、絵本を通して伝承していくことで、わかりやすく興味が大きくなると思う」等という意見が得られたことから、郷土料理を次世代へ伝えていくために幼児向けの教材を開発していく必要がある。